

本郷遺跡・玉手山遺跡

—マンション建設に伴う—

1985年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市においては、昭和59年度も多数の発掘調査が実施されました。本書では、その中でも比較的小規模な原因者負担事業についての概要を報告しています。

原因者負担による発掘は、誤解やトラブルを招くことが多く、調査費用、調査期間、調査における安全性等、多数の問題が生じてきます。特に、小規模な調査においては、多くの困難を伴います。しかし、最低限の調査は必要であり、また調査を実施すれば、その成果を公開する義務があります。

原因者負担事業だけでなく、発掘調査は発掘届出者の文化財に対する理解なくしては、成り立たないものです。文化財が過去、現在、そして未来の人類の生活に、いかなる役割を果たしているのかということを理解して頂くことが最も大切だと考えます。

本書で報告する調査の原因者の方々には、この点に関して理解を示して頂き、十分とは言えないながらも発掘調査を実施し、本書を刊行することができました。

今後とも、柏原市は、これらの原則のもとに調査を進めていきたいと思いますので、御理解、御協力を惜しまれることのないようによろしくお願いします。

調査、および本書の刊行に御協力頂いた関係各位、また地元の方々に改めて謝意を表わします。

昭和60年3月31日

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が昭和59年度に原因者負担事業として実施した発掘調査中、本郷遺跡84—2次調査、玉手山遺跡85—1次調査の概要報告書である。
2. 本郷遺跡84—2次調査は柏本孝治氏、玉手山遺跡85—1次調査は西村義郎氏の原因者負担によるものである。
3. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史が担当し、調査の整理および本書の編集・執筆も安村が行なった。
4. 調査、整理に際しての協力者は、下記の通りである。

石田 博	竹下 賢	北野 重	桑野一幸	田中久雄	松田光代
笹井京子	秋田大介	石田成年	伊藤芳匡	清瀬健二	森田好則
中田ゆかり	藤本直美	松村富子	麻 栄三郎	朝田行雄	井上岩次郎
奥野 清	川端長三郎	谷口鉄治	西岡武重	今才春信	道篠其藏
森口喜信	山田貞一	山本芳一	乃一敏恵	松成早苗	吉居豊子

目　　次

第一章 本郷遺跡

1. 調査の概要.....	1
2. 調査成果.....	2
3. 遺物.....	3

第二章 玉手山遺跡

1. 調査の概要.....	5
2. 造構.....	7
3. 遺物.....	9

第1章 本郷遺跡

1. 調査の概要

柏原市本郷3丁目における、マンション建設に先立つ緊急発掘調査である。8月27日の試掘調査の結果、弥生時代後期、および古墳時代の遺物が発見され、発掘調査を実施することにした。調査は、重要な造構が発見された場合、もしくは建物基礎よりも浅い面で遺物、造構が発見された場合は、調査範囲を拡張することを条件に、マンション予定地の中央に、 $5.3m \times 8.3m$ のトレンチを設定して実施した。調査は9月26日から10月4日まで実施し、その結果、古墳時代後期の溝を確認した。しかし、建物基礎予定深度が包含層上面に達するのみであるため、基礎工事に際して立会調査を行うことを条件に、マンションの建設を認めた。なお、調査に要した諸費用は、届出者である柏元孝治氏の負担によるものである。



図1 調査位置図

2. 調査成果

本郷遺跡では、過去に4回の発掘調査が実施されたのみであり、実態は依然として不明である。これまでの調査では、縄文時代中期から中世にかけての遺物・遺構が発見されており、TP 11mから14m前後で包含層が確認されている。しかし、本郷遺跡は旧大和川の氾濫原に位置するため、層序は複雑であり、包含層の深度も、調査地によってかなり異なっている。

今回の調査地は、本郷遺跡推定範囲の東端近くに当たる。調査地の現状は畠であり、約1mの盛土がなされていた。盛土下には、旧耕土、床土があり、その下層では砂層と粘質土層の互層となっている。その複雑な堆積状況から、最低3回以上の氾濫があったと推定される。その下層には、約80mの厚さの灰色粘土層がみられ、弥生時代後期から7世紀頃の遺物を含んでいた。灰色粘土下は、淡黄褐色粘質土の地山に至り、TP 13.3m前後である。これまでの調査では、TP 11m前後まで掘削しているにもかかわらず、地山は確認されていない。今回の調査地付近が、非常に高いことが確認された。

遺構は、地山に掘り込まれた南東から北西方向の溝が検出された。幅は280cm、深さ110cmで、断面U字形を呈する。埋土は、上層が黒灰色粘土で6世紀後葉から7世紀中葉の遺物を含んでいる。下層は青灰色シルトであり、遺物は全く含んでいない。上層から出土した遺物は、少量ではあるが、完形、もしくは完形に近いものが多い。また、須恵器の甕(?)は、200片以上に破碎されており、意識的に破碎、投棄されたものと考えられる。

土器量が少ないとことから、調査地は、集落の中心部からやや離れているのではないかと推定される。それにもかかわらず、溝内から遺存状態の良好な土器が出土しており、歯骨も出土していることから、溝付近で、祭祀等が行なわれた可能性も考えられる。

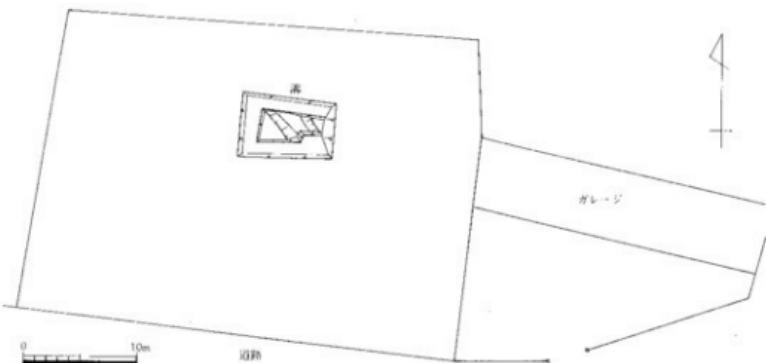


図2 調査地周辺図

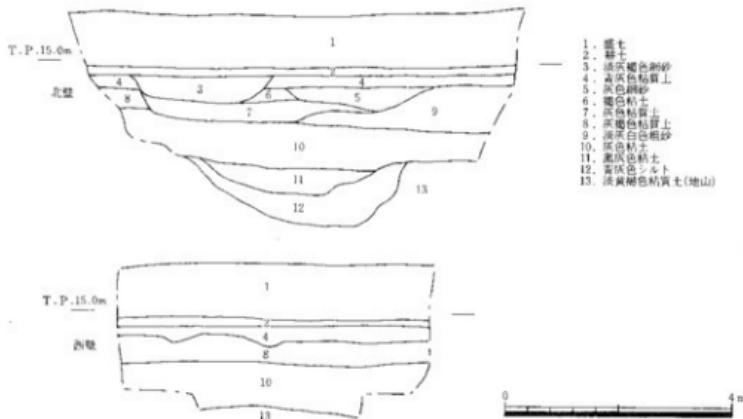


図3 土層断面図

3. 遺物

遺物は、少量であるが、残存状態の良好なものが多い。

1～3は弥生土器。1は小さな底部から内窓気味の体部へ続き、口縁部は丸くおさめる小形の鉢である。内面ヘラケズリからナデ、外面ナデ調整。2も小形の鉢。口縁端部を欠損するが、1と同様の端部を有すると思える。底部は、指頭押圧によって貼り付けられ、中央がくぼみ、ハの字形に開く形態である。内外面ナデ調整。3は高杯の杯部。内窓する杯部は弱い段をなして外反する口縁部へ至り、口縁端部は水平に近く開く。内外面ともナデ調整。口縁部下に、弱いヘラミガキを施す。弥生土器はいずれも後期後葉の時期と考えられる。

4・5は須恵器杯蓋、6は有蓋高杯。有蓋高杯は円形透孔を有するが、三方か四方か不明である。7は甌。外面格子目叩きの後、回転クシナデ調整。内面に同心円叩き目を残す。

8～13は土師器。8の杯は、内外面ナデ調整。9は手づくねの小形椀。外面に指頭压痕を多数残す。10の高杯は高さ7.5cmとやや小形である。ハの字形に開く脚部に、別作りの杯部を接合したものである。全面指ナデ、ナデによって調整する。11の高杯は、杯部外面に弱い段を有し、見込みに不明瞭な一重のラセン文、内面に放射状暗文を施す。外面の段の上下には、ヘラ状工具による浅い刻み目が二段に施される。12は羽釜。鍔は水平に広がり、口縁部は外反し、丸くおさめる。外面ヨコナデ、口縁部内面ヨコハケからヨコナデ、体部内面指頭調整。13は把手付の鍋。外面上半タテハケからナデ、下半ヘラケズリ、内面上半ヨコハケからナデ、下半ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。

土師器・須恵器は6世紀中葉から7世紀中葉にかけての時期の遺物である。

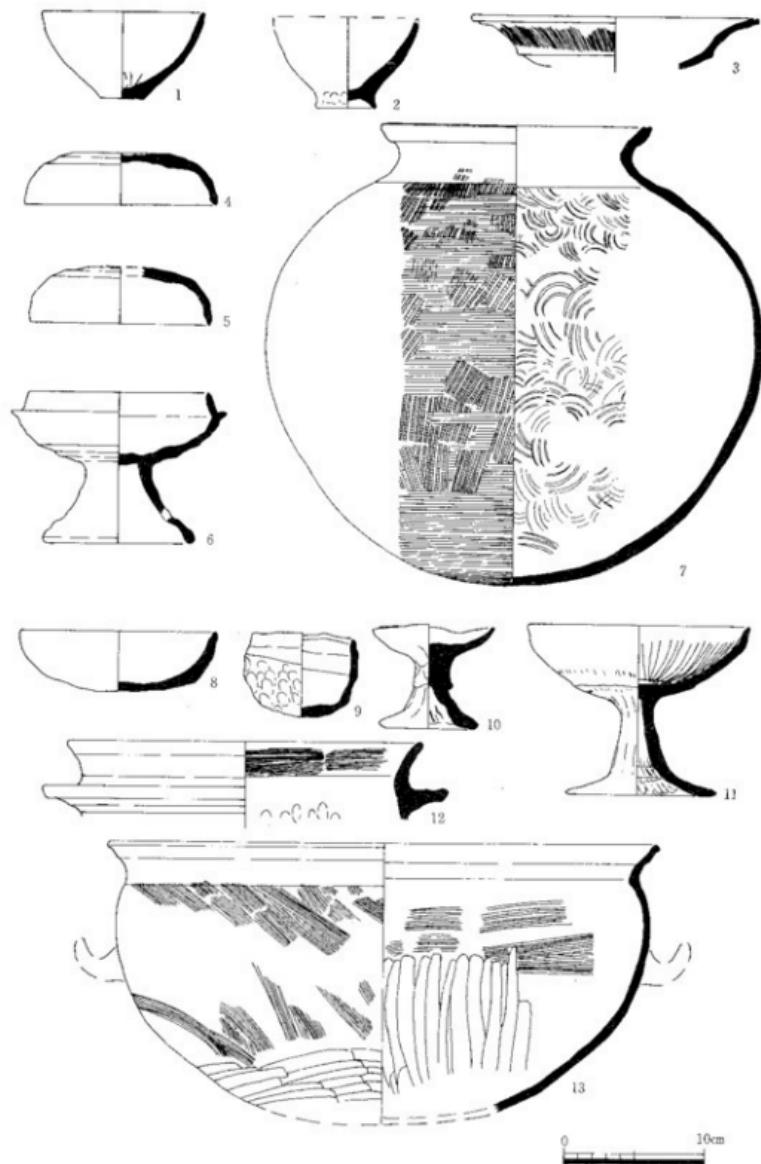


図4 土器実測図

第2章 玉手山遺跡

1. 調査の概要

柏原市片山町10-1・2、29-1における賃貸マンション建設に先立つ緊急発掘調査である。調査着手前に、一部削平が行なわれたため、工事を中止させ、1985年2月7日から調査に着手し、23日に終了した。調査深度は建物基礎深度までとし、検出された溝の深さ、形状を調べるために、部分的にトレンチを設定する方法で実施した。なお、調査に要した諸費用は、届出者である西村義郎氏の負担によるものである。

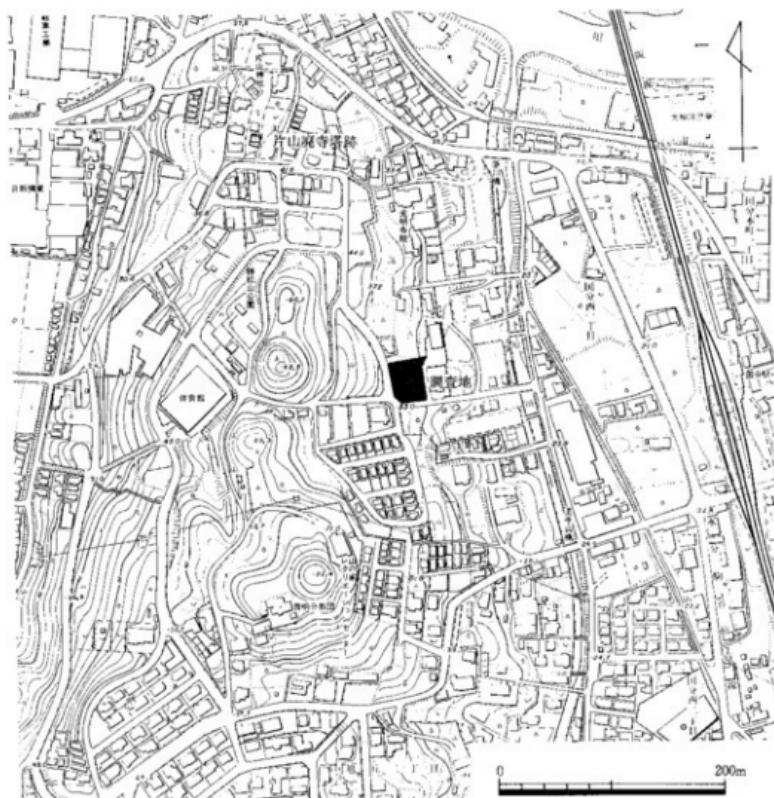


図5 調査地位図



図6 調査地周辺図

2. 遺構

発掘調査は、調査対象地の西半に $9\text{m} \times 13\text{m}$ の調査区を設定し、これをA区として着手した。その後、調査区中央で東西方向の溝が確認されたため、A区の東約4mに $1\text{m} \times 13\text{m}$ のトレーンチを設定し、これをB区とした。

A区で検出した溝は、西から東へのびており、溝の南壁、および底はほぼ東西方向に続くが、北壁は東に向かうにつれ、徐々に広くなっている。溝幅はA区西端で280cm、B区で980cmとなる。溝の断面は、A区西端ではV字状を呈するが、B区では弱いU字状を呈する。深さは、160～200cm、底の傾斜角は10度前後を示す。埋土からは流水の痕跡を見出しづら、また、A区西端でV字断面を呈することから、明らかに人工の溝と判断される。

溝底部付近では、遺物は見られず、溝中層の8、9、14層に遺物が包含されている。特に、8層黒褐色土には、小片が多いが、多数の遺物が包含される。遺物には、6世紀から8世紀のものがみられるが、7世紀後半から8世紀前半にかけての遺物が特に多く、溝の掘削時期は、7世紀後半頃と推定される。

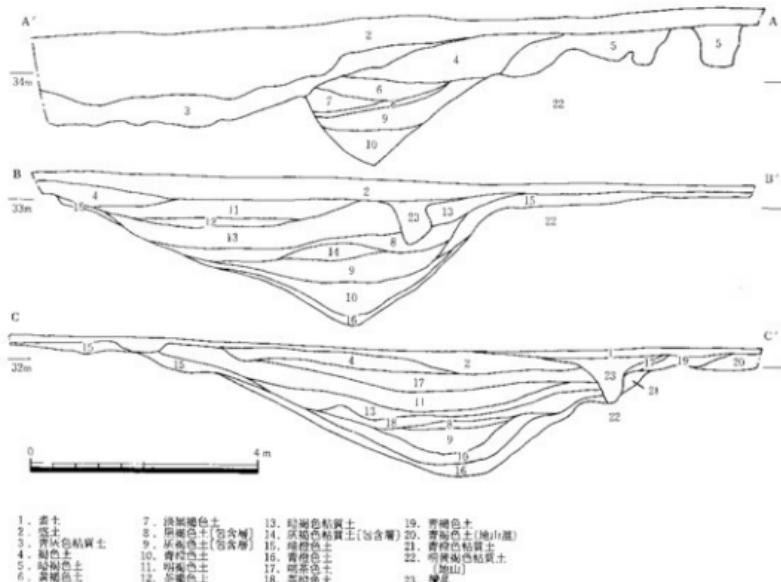


図7 土層断面図

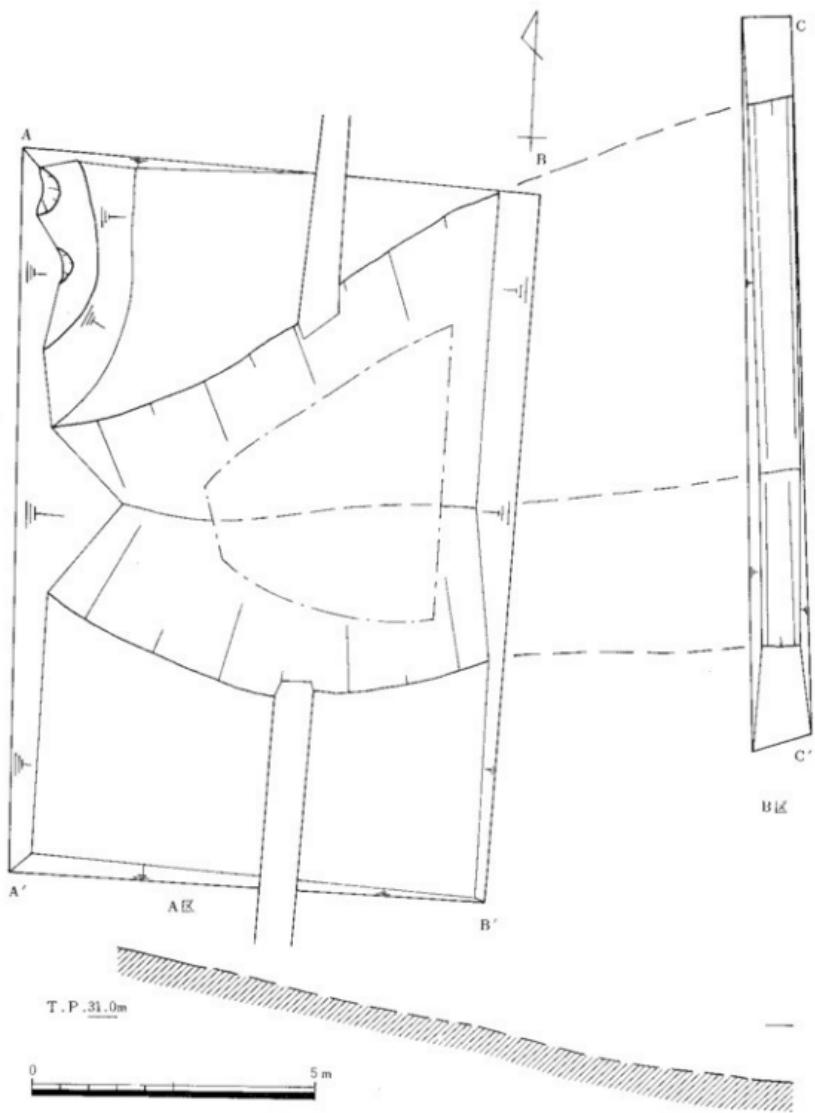


図8 透構図・溝底断面図

A区北西隅では、2個のピットを検出した。南側のピットからは土師器の鉢底部（2）が出土している。8世紀代の遺構と判断されるものであるが、掘立柱柱穴となるかどうかは、埋土からは確認できなかった。

それ以外には、遺構は検出していない。これは、遺構が存在しないためではなく、おそらく、過去の削平によって、遺構が消滅したものと考えられる。A区北西隅以外では、数10cmから1mに達する地山削平が確認される。過去に、ぶどう畑開墾、宅地造成などによって、数回の削土、盛土が行なわれているようである。そのため、小片ばかりであるが、盛土内にも弥生時代から奈良時代にかけての遺物がかなり混入している。調査地周辺には、7～8世紀代の掘立柱建物群が存在していたと考えられる。

3. 遺物

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、平瓦などが出土している。

1は弥生土器の底部。直径3.8cmの平底から、斜上方へとのびる胴部を有する。胸部と底部との境でややくびれる。全面ナデ調整。盛土内から出土している。他にも同様の底部破片が数点出土している。

2～5は土師器。2は鉢の底部。比較的高い、貼り付け高台の破片である。高台は外方へふんばる形態を示し、端部は厚く、丸味をおびる。全面ナデ調整。A区北西隅の南側ピットから出土している。3、4は杯。3は口縁端部が外反し、内外面ともナデ調整。暗文の有無は不明。4は、3に比してやや浅く。口縁部は斜上方へのびる体部からまっすぐのび、端部はやや尖り気味になる。内外面ともナデ調整。暗文の有無は不明。3、4は共に、A区西半の溝内から出土している。5は皿。復元口径22.0cm。器壁は薄く、暗橙色を呈する。口縁端部は肥厚し、内面で弱い段をなす。口縁部ヨコナデ、体部ナデ調整。表面剥離が著しい。A区溝内出土。

6～9は須恵器。6は内面にかえりを有する杯蓋。口縁端部は肥厚し、かえりは断面三角形を呈し、口縁部下端とほぼ同じ高さになる。内外面とも回転ナデ調整。盛土内から出土。7も杯蓋であるが、内面のかえりは消失している。天井部から内寄気味に口縁部へ至り、口縁端部は断面三角形状を呈し、垂下する。つまみは扁平なボタン状、中央がやや突出する。口縁部および内面回転ナデ調整。外面回転ヘラケズリ調整。8は立ち上がりを有する杯身。外面下半は回転ヘラケズリ、外面上半と内面は回転ナデ調整。9は高台を有する杯身。体部は斜上方へまっすぐのび、口縁部へと至る。高台は低く、底面がやや内外面へはみだす。内外面とも回転ナデ調整。7～9は、いずれもA区溝内から出土しているが、7、9のように8世紀代の遺物量が最も多く、6のような7世紀中葉前後の遺物も若干含まれている。しかし、8のような6世紀代の遺物はごく稀であり、混入と判断してよいものと思われる。

10は形象埴輪の破片である。家形埴輪の軒部分の破片と考えられる。屋根から軒先に至る部分に、幅2.5cmの低い凸帯を貼り付け、垂直に立ち上がる壁と下方に粘土を補充することによ

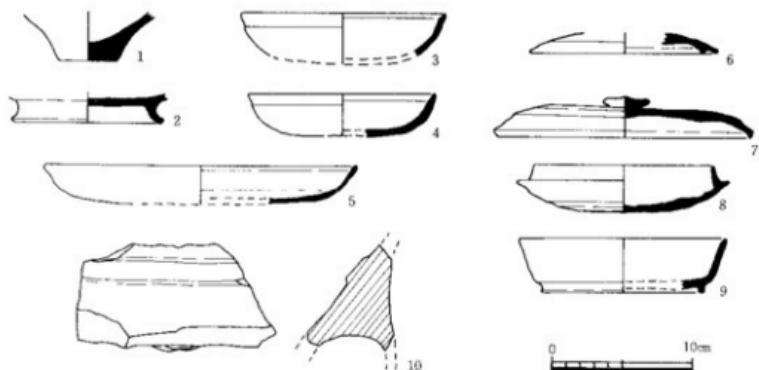


図9 出土遺物実測図

って接合する。内外面ともナデ調整。暗黄褐色を呈するが、断面黒色を呈し、野焼きと考えられる。胎土はやや粗く、石英・長石の砂粒を多く含む。5世紀初頭前後かと推定されるが、同時期と思える円筒埴輪片も数点出土している。しかし、いずれも磨滅が激しく、転落してきたものと考えられる。調査地の西斜面上方には玉手山1号墳が存在する。これらの埴輪は、1号墳、もしくはその近辺の埴輪と考えられる。また、窯窓焼成による須恵器の円筒埴輪片も出土している。断面が方形に近いしっかりした凸帯を有し、外面はB種ヨコハケ、内面はナデを施す。5世紀中葉～後葉のものと考えられる。

4.まとめ

今回の調査で検出された溝は、7世紀中葉～後葉頃に掘削されたものと考えられる。しかし、溝の性格は不明である。今回の調査地から道路を隔てた南側の西村歯科建設の際の調査でも、やはり7世紀中葉から8世紀中葉の遺物が多数出土しており、今回の遺物と同時期を示す。これらの事実から、調査地周辺には7世紀から8世紀にかけての集落が存在したと考えられる。残念ながら、地山の削平が著しく、掘立柱穴などはほとんど確認できなかったが、溝の掘削土量はかなりの量にのぼる。

調査地の北西250mの位置には、700年前後の建立と考えられる片山廃寺塔跡が存在する。塔跡の建立時期と今回の出土遺物が示す時期が一致することから、片山廃寺の創建氏族の居住地が、今回の調査地周辺に存在したものと考えることができる。

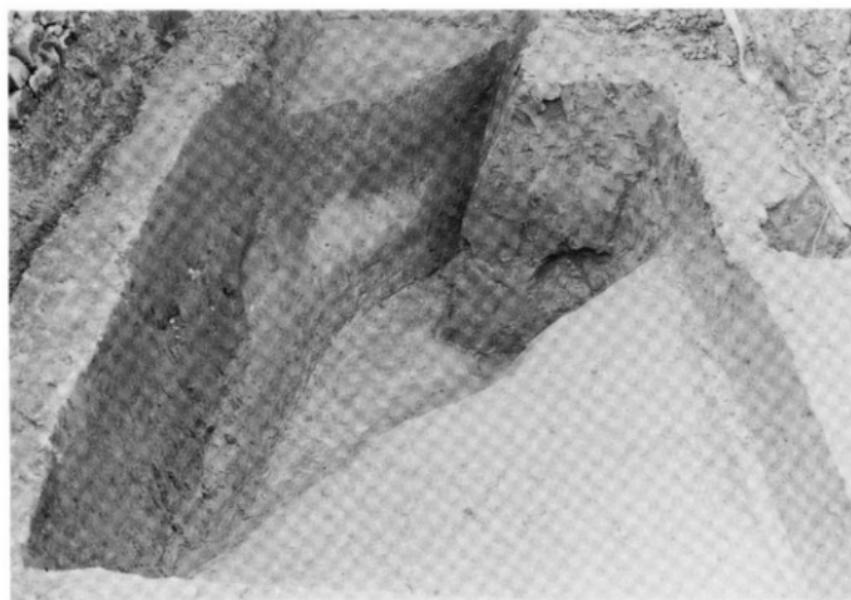
調査地周辺では、最近の急激な宅地化によって、旧地形を残す土地がほとんどみられなくなった。今回の調査地は旧地形を残す最後の地であり、マンションが建設されることは残念である。しかし、今回の調査によって、片山廃寺とその創建氏族の集落との関係が少しでも明らかになったことがせめてもの救いであった。

図 版

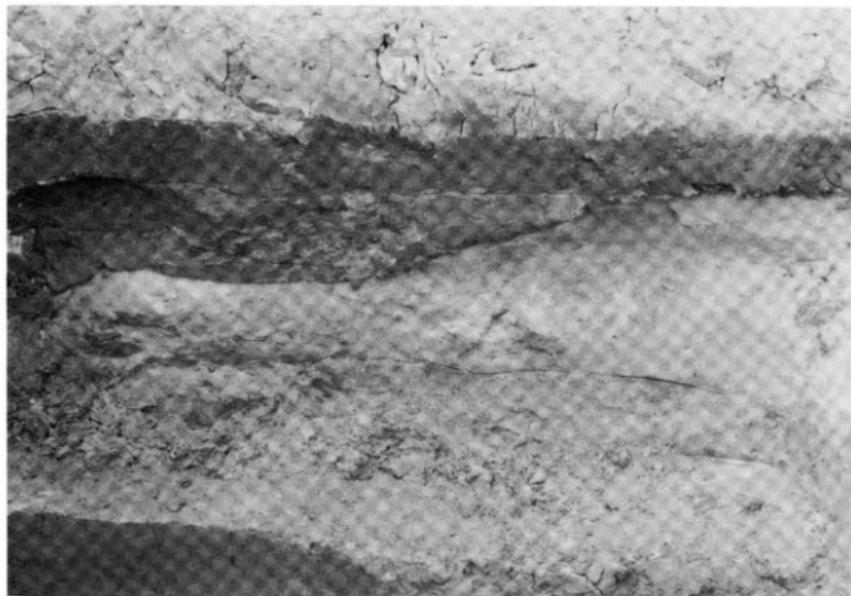
図版一
本郷遺跡全景



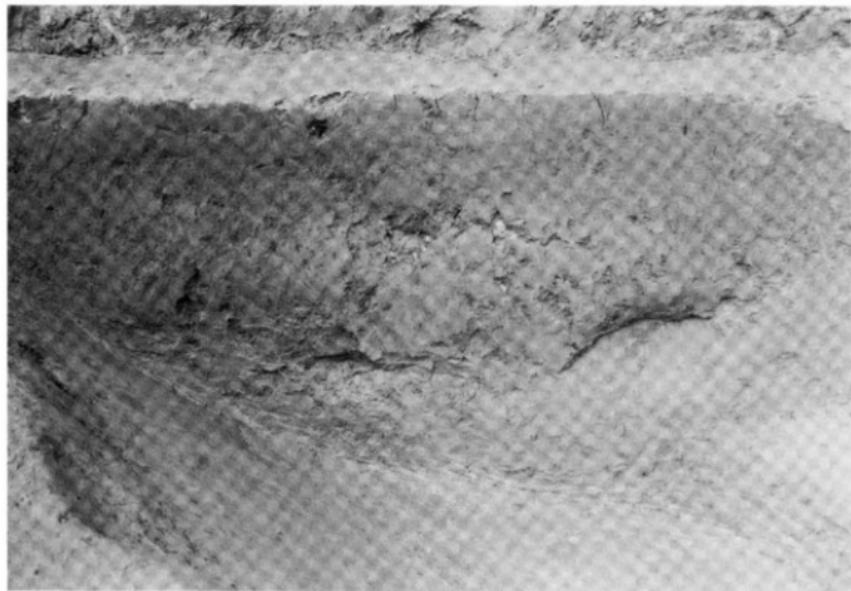
東から



西から



北壁上層



北壁下層



1



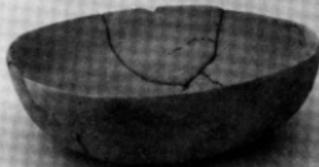
2



4



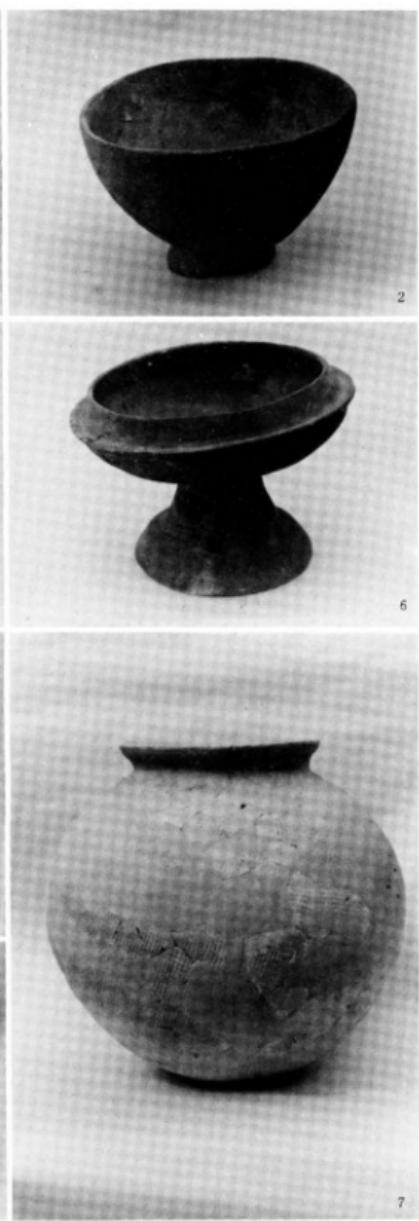
6



8



11



7

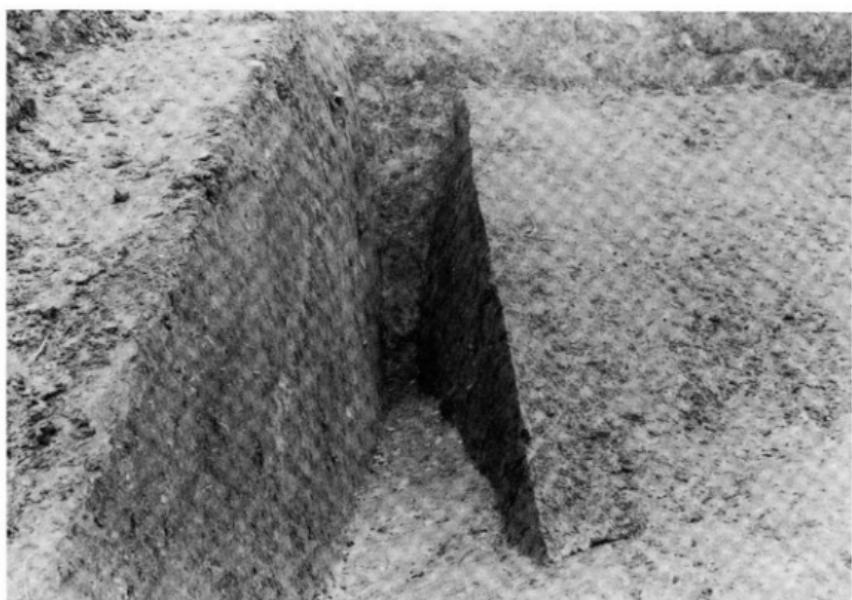


西から



北から

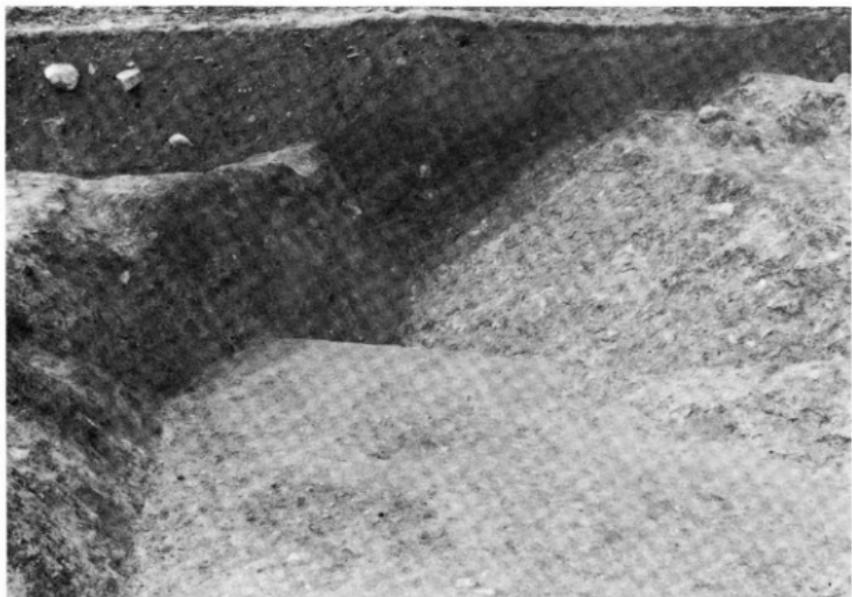
図版五
玉手山遺跡・A・B区



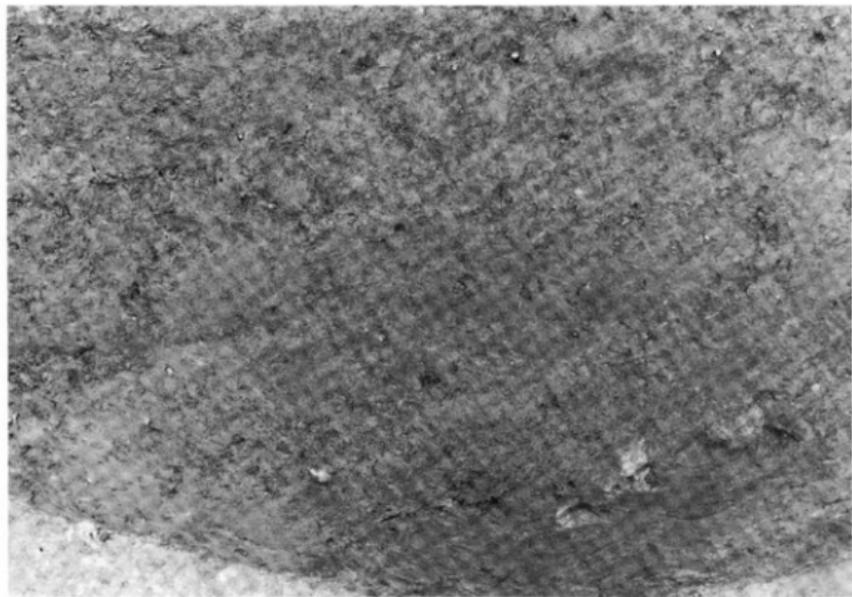
A区東端トレンチ



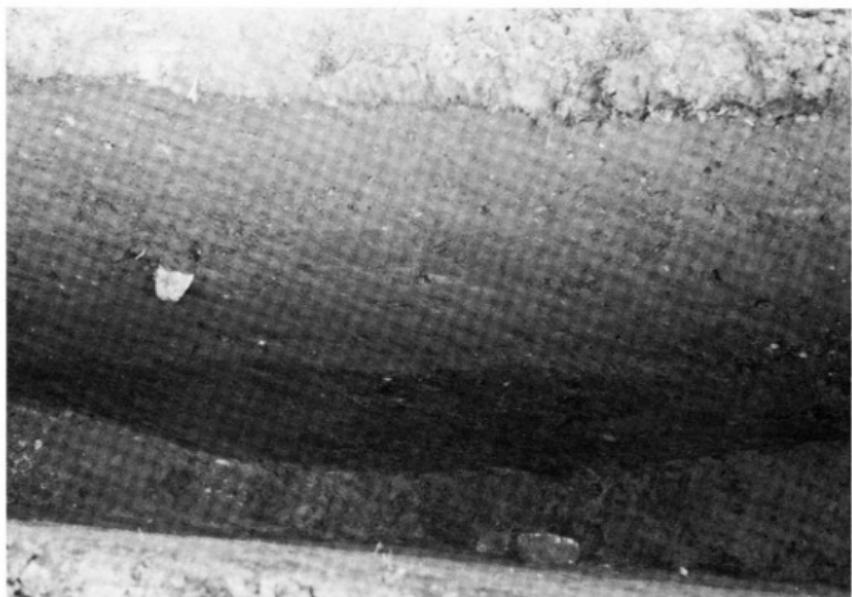
B区



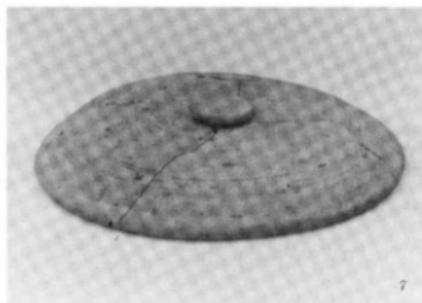
A-A'断面



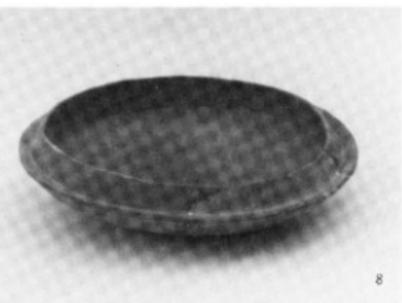
B-B'断面



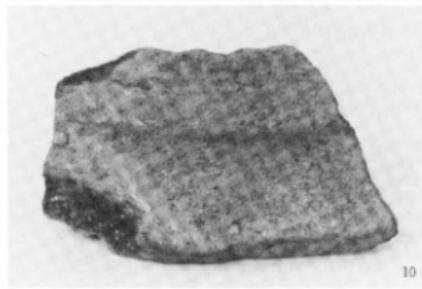
C—C'断面



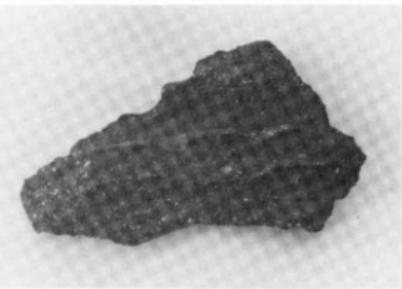
7



8



10



遺物

本郷遺跡・玉手山遺跡

1985年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番55号

電話 (0729) 72-1501 内 404

発行年月日 昭和60年3月30日

印 刷 K.K 中島弘文堂印刷所

